通時的に見る maybe と類義副詞の頻度の変遷

藤田　郁

Abstract

According to the *Oxford English Dictionary*（online), the adverb *maybe* first appeared in 1400. However, although *maybe* now seems a quite common adverb in English, this adverb did not appear frequently until the middle of the nineteenth century. Some English-Japanese dictionaries published in Japan describe the meaning and possibility of occurrence of *maybe* and its synonyms, using percentages that vary for each adverb. The *OED* explanation of *maybe*, on the other hand, can be read as stating that *maybe* is equivalent to *possibly* and *perhaps*. Additionally, one English-Japanese dictionary suggests that certain auxiliary verbs tend to collocate with these adverbs, such as *should* tending to collocate with *probably*. Since the frequency of occurrence of *maybe* in COHA soared from 1890s until 2000s, chiefly in the fiction genre, this paper will investigate the frequency of the other adverbs synonymous to it, *perhaps*, *possibly*, and *probably*, and the collocations of these four adverbs and modal auxiliary verbs to observe how these frequencies have changed and whether there are differences from 1810 to 2000. Even though the frequency of maybe surged from 1890, the other adverbs' frequencies of use, particularly *perhaps* and *possibly*, have not dwindled in the face of the increased use of *maybe*. Moreover, the analysis of this paper reveals that *probably* tends to collocate with *will/would* rather than *should*. This paper observes the vicissitudes from 1810 to 2000 on *maybe* and the other similar adverbs and the modal auxiliary verbs, which collocate with these adverbs.

キーワード：副詞，助動詞，maybe，Corpus of Historical American English

1. はじめに

言語は，英語や日本語に限らず絶えず変化し，その意味や文法など刻々と変化する。加えて，学習者が英語や他言語を学習する際には，各々の課程やレベルなどに応じて，学習を容易にするために一般化された情報や事象から学習することが多い。無論，統一された普遍的見解や知識も重要だが，一方で，言語の変化などのさまざまな要因による周辺的現象の存在を示すのもまた，学習者の英語学習の質を高めるには必要であると考える。

本稿では，1810 年以降のアメリカ英語のコーパスを使用して 1810 年代から 2000 年代までの期間を 10 年ごとに分け，maybe, perhaps, possibly, probably の頻度変化とこれらの副詞と助動詞の共起を通時的に調査する。19 世紀中頃より maybe が使用される頻度が増えた代わりに，他の

同義の副詞の頻度が減少するかどうか，また副詞 possibly と助動詞 can/could は共起しやすいのかどうかをアメリカ英語に限定し分析，考察した。

2. 問題の所在

Oxford English Dictionary（オンライン版；以下 OED）の maybe の項（s.v. maybe）は以下のように記述されており，語の意味という点では maybe と perhaps, possibly はおよそ同様に用いることができるように読み取れる。

> *adv*. A. 1. a.
> Possibly; perhaps.

この OED における maybe の項の記述は，『ジーニアス英和辞典第 5 版』（以下 G5）に見られるような，maybe と possibly が等号で結ばれるものではなく，possibly の方が，maybe よりも話し手の確信度あるいは物事の実現可能性が下がるという記述と異なっている（以下引用部の下線は筆者による）。

> s.v. maybe
> 1. ことによると，もしかしたら，ひょっとしたら《◆（1）話し手の意識としては起こる確率が 5 割程度；話し手の確信度は probably, maybe, perhaps, possibly の順に弱くなる；語法（3）perhaps の方が堅いニュアンスがあり，書き言葉では perhaps の方がよく用いられる》
>
> （G5）

また，同じ G5 の perhaps の項を見ると，この確信度について更に具体的な数値で説明されている。この数値を見る限りでは，possibly と maybe の確信度には差があり，また maybe と probably の間にも数値に差が見られる。

> s.v. perhaps　語法
> （2）［確信の度合い］同種類の副詞を話し手の確信度によっておおまかに分類すると以下のようになる。a）30% 以下：possibly. b）30% 以上：perhaps. c）35-50%：maybe. d）65% 以上：likely. e）70% 以上：probably, presumably. [...]
>
> （G5）

G5 の記述を読む限りでは，probably, maybe, perhaps, possibly のそれぞれの表す確信度あるいは実現可能性には差がある様に見える一方で，OED の記述においては maybe, perhaps, possibly の 3 副詞においては大きな差はない様に読み取れる。他の英和辞書を見てみると，G5 ほど詳細な記述はなされていないが，以下の『ウィズダム英和辞典第 4 版』（以下 W4）の記載に見られる

ように，maybe の項に perhaps は記述されていても，possibly は記述されておらず，OED と英和辞書の記述には，若干の差が窺われる。

> s.v. maybe
> 1. [[不確実]]（確信はないが）もしかすると，ことによると（perhaps); たぶん，おそらく
> （W4）

また，*Cobuild Advanced Learner's Dictionary* 9th ed.（以下 C9）の maybe の項には，perhaps や possibly が同義語として列挙されてはいないものの，possibly を使用（法助動詞 may と共起）して説明されており，maybe と possibly の意味の近さを読み取ることができる。

> s.v. maybe
> 1 ADV You use Maybe to express uncertainty, for example when you do not know that something is definitely true, or when you are mentioning something that <u>may possibly happen</u> in the future in the way you describe.
> 2 ADV You use maybe when you are making suggestions or giving advice. Maybe is also used to introduce polite requests.
> 3 ADV You use maybe to indicate that, although a comment is partly true, there is also another point of view that should be considered.
> （C9）

Greenbaum（1969）や Quirk *et al.*（1985）は，これらの副詞の確率を具体的な数値を用いて説明していない。Quirk et al.（1985: 620）では，“Content disjuncts” を “Type（a): Degree of truth” および “Type（b): Value judgment” の 2 タイプに分類した内, “Type（a)” をさらに 3 グループに分けた “Group（ii）These express some degree of doubt” に maybe, perhaps, possibly を位置付けている。なお，さらなる細分化はなされていないため，これら 3 副詞をはじめその他の同グループに分類されている各副詞による “degree of doubt” の差は明らかになっていない。小西（1989: 1379）は，maybe と perhaps の関係について，Swan（1980), Greenbaum（1969), McCaleb and Yasuda（1983）を参照した上で，次のように説明している。

> Perhaps と maybe: ともに見込みがあまりなく話し手の不確実な気持ちを表す。maybe は ‘It may be that ....’ が発展してできた語で，perhaps よりもくだけた感じを伴い，話し言葉で好まれる。特に米国語法で多用される。
> （III. 関連事項 2. 類語との関係（i））

加えて，perhaps, possibly, probably について，以下のように説明し，割合を数値では表していないものの，probably, perhaps, possibly それぞれの可能性・確率に差があると説明している。

いずれも「多分」「おそらく」の意を表すが probably は見込みがかなり強い場合にもちいられ「十中八九」の可能性を示す。それに対し perhaps, possibly では通例それよりも可能性が低いことが示される。さらに possibly の方が一般に perhaps よりも低い確率を示す：
（小西（1989: 1380）

OED では，maybe の初出は 1400 年とされているが，その後頻繁に使われることなく，19 世紀半ばに再度（特に詩人によって）用いられ始め，使用頻度が上がっているとの記述がある。

s.v. maybe, *adv*., *n*., and *adj*. Etymology
Although found in major 17th-cent. writers, the word is not frequent in standard literary English before the mid 19th cent., but becomes frequent in poetic sources in the later 19th cent. It occurs frequently in 19th-cent. novels as a marker of dialectal or colloquial speech, and is labelled in N.E.D.（1906）as 'archaic and dialectal' and by J. Elphinston Princ. Eng. Lang.（1750）as a colloquialism, although it is entered without comment in Johnson, Webster, Imperial Dict., and Cent. Dict.

先に挙げた OED の記載では，maybe, perhaps, possibly の確信度の差には詳細に触れておらず，maybe の欄に perhaps と possibly が同義語として併記されているのみである。その maybe が頻繁に使われるようになったことで，他の同義である perhaps, possibly の使用される頻度は同じ 19 世紀半ばから変化あるいは減少したのか否かが本稿で明らかにしたい一つ目の課題である。そのために，アメリカ英語に限定されはするものの，1810 年以降の英語資料を 4 ジャンルに分類してあるコーパス Corpus of Historical American English（以下 COHA）を用いて，maybe, perhaps, possibly, probably の頻度をデータの存在する 1810 年代から 10 年ごとに抽出し，比較しやすいよう 100 万語あたりの数値（Per Million Words; 以下 PMW）に直したものを分析，考察する。（maybe, perhaps, possibly, probably の 4 副詞の持つ確実性の差や，これらがどのように使い分けがなされているかは，談話分析を用いて考察した Miyake（1996）や Pic and Furmaniak（2012）を参照されたい。）

本稿で考察するもう一つの点は，maybe, perhaps, possibly, probably と，法助動詞（推量の助動詞；modal auxiliary verbs）の共起傾向である。G5 の perhaps の項には，possibly とよく一緒に用いられる推量の助動詞は could と might, probably は should であるとされ，また「推量の may には perhaps の意はすでに含まれているので Perhaps they may know the answer to that question. の様にいうのは冗語的であるが，ためらいの気持ちを表すのにしばしば用いられる。」とされている（s.v. perhaps，語法（1）［助動詞の組み合わせ］）。「推量の may」に「perhaps の意はすでに含まれている」とあるが，perhaps の意が may に含まれているのなら，OED で同列に挙げられている maybe や possibly はどうなのか，また，例えば possibly と can/could の共起は冗長な表現として避けられている可能性はあるのか，という疑問から，1810 年代から 2000 年代[1] までの共起傾向を考察したい。本稿で取り上げる助動詞は，以下 Swan（1997）の記述を参考に，通常 ought to の 2 語で用いられる ought を除いた 9 助動詞を対象とする。

> The verbs *can, could, may, might, will, would, shall*（mainly British English）, *should, must* and *ought* are called 'modal auxiliary verbs'. They are used before the infinitives of other verbs, and add certain kinds of meaning connected with certainty or with obligation and freedom to act（see next section）.
>
> （Swan（1997: 333））

小西（1989: 1374, NB21）では，perhaps とともに用いられる助動詞として shall, can, could, may, might を挙げている。また,「perhaps, possibly は助動詞 may と共起するが, probably は通例不可」（小西（1989: 1381）),「possibly と may との共起を冗漫とする人もある [Copperud] が，実際には用いられる。」（小西（1989: 1423））としているが，先に触れた G5 に見られる perhaps と may の共起については記述されていない。

3. 分析

本節では，COHA から必要データを抽出し，maybe, perhaps, possibly, probably の 1810 年代から 2000 年代までの 10 年ごとの生起頻度の比較分析及び 4 副詞と助動詞の共起傾向を分析する。COHA のジャンル分けは 4 分類となっており，fiction, popular magazine（magazine/mag）, newspapers（news）, non-fiction books（nf）である。news のみ 1860 年以降のデータであり，他の 3 ジャンルはいずれも 1810 年以降のデータである。

使用した COHA データは，既に 4 分類となっており，それぞれが 10 年ごとにフォルダ分けされたものである。その 10 年ごとのフォルダから各副詞を含む行を抽出したファイルを作成し（a.），スクリプト（b.）にて副詞の生起頻度を求めた。

```
a. perl -ne 'if（/\b（maybe|perhaps|possibly|probably）\b/gi）{print}' COHA_FILE_YEAR > ADV_COHA_FILE_YEAR
b. perl -ne 'while（/\b（maybe|perhaps|possibly|probably）\b/gi）{$a = lc $&; print "$a\n"}' ADV_COHA_FILE_YEAR | sort | uniq -c
```

尚，スクリプト中におけるファイル名は便宜上実際のファイル名とは異なる表記をしており，また斜字体「*YEAR*」の部分は，1810, 1820... と対象の年代に合わせて変更して実行している。PMW を求める際の分母となる，ファイルごとの総トークンは，以下のスクリプトによって求めた。ファイルごとの生起頻度，トークン，PMW は以下の表 1. の通りである。

```
（c.）perl -pe 's/[.,;:!?`"]+/ NONWORD/g;' COHA_FILE_YEAR | perl -pe 's/NONWORD//g;' | perl -ne 'while（/\b[A-Za-z0-9-]+\b/gi）{print "$&\n"}' | wc -l
```

表 1. Maybe, perhaps, possibly, probably の生起頻度，トークン，PMW

		frequencies						PMW			
		maybe	perhaps	possibly	probably	TOKENS	RATES	maybe	perhaps	possibly	probably
fiction	1810	-	237	17	15	611,115	0.61	0.00	387.82	27.82	24.55
	1820	26	1,715	173	481	3,559,095	3.56	7.31	481.86	48.61	135.15
	1830	85	2,725	224	663	7,205,989	7.21	11.80	378.16	31.09	92.01
	1840	178	2,912	331	689	8,386,935	8.39	21.22	347.21	39.47	82.15
	1850	136	3,799	442	1,031	8,637,520	8.64	15.75	439.83	51.17	119.36
	1860	428	3,555	351	966	8,775,000	8.78	48.77	405.13	40.00	110.09
	1870	346	4,061	613	996	9,715,096	9.72	35.61	418.01	63.10	102.52
	1880	456	4,253	657	1,245	10,630,841	10.63	42.89	400.06	61.80	117.11
	1890	351	4,204	729	1,309	10,624,072	10.62	33.04	395.71	68.62	123.21
	1900	1,098	4,484	669	1,105	11,397,053	11.40	96.34	393.44	58.70	96.95
	1910	1,878	4,389	704	1,441	11,295,524	11.30	166.26	388.56	62.33	127.57
	1920	2,432	4,338	589	1,818	11,908,154	11.91	204.23	364.29	49.46	152.67
	1930	3,544	3,832	547	1,901	11,287,083	11.29	313.99	339.50	48.46	168.42
	1940	4,555	4,294	611	2,049	11,355,946	11.36	401.11	378.13	53.80	180.43
	1950	4,883	4,029	677	2,117	11,418,366	11.42	427.64	352.85	59.29	185.40
	1960	4,976	3,898	748	2,271	11,017,890	11.02	451.63	353.79	67.89	206.12
	1970	5,732	3,892	670	2,651	11,042,106	11.04	519.10	352.47	60.68	240.08
	1980	5,886	3,867	613	2,873	11,534,362	11.53	510.30	335.26	53.15	249.08
	1990	7,888	3,474	599	3,208	12,743,270	12.74	618.99	272.61	47.01	251.74
	2000	8,389	3,442	786	3,974	13,974,102	13.97	600.32	246.31	56.25	284.38
mag	1810	-	50	7	17	84,287	0.08	0.00	593.21	83.05	201.69
	1820	3	734	74	466	1,631,869	1.63	1.84	449.79	45.35	285.56
	1830	5	1,293	186	847	2,986,608	2.99	1.67	432.93	62.28	283.60
	1840	12	1,202	186	722	3,385,220	3.39	3.54	355.07	54.94	213.28
	1850	8	1,387	130	682	4,007,352	4.01	2.00	346.11	32.44	170.19
	1860	23	1,566	246	846	4,225,930	4.23	5.44	370.57	58.21	200.19
	1870	26	1,731	283	1,040	4,240,581	4.24	6.13	408.20	66.74	245.25
	1880	20	1,692	303	968	4,241,526	4.24	4.72	398.91	71.44	228.22
	1890	30	1,729	372	1,027	4,449,366	4.45	6.74	388.59	83.61	230.82
	1900	42	1,902	463	1,240	4,815,847	4.82	8.72	394.95	96.14	257.48
	1910	61	2,234	445	1,218	5,405,787	5.41	11.28	413.26	82.32	225.31
	1920	108	2,403	468	1,345	5,852,968	5.85	18.45	410.56	79.96	229.80
	1930	260	1,699	459	1,372	5,775,193	5.78	45.02	294.19	79.48	237.57
	1940	353	1,698	381	1,455	5,598,325	5.60	63.05	303.31	68.06	259.90
	1950	454	1,483	373	1,305	5,715,863	5.72	79.43	259.45	65.26	228.31
	1960	559	1,757	384	1,262	5,626,912	5.63	99.34	312.25	68.24	224.28
	1970	591	1,843	375	1,295	5,512,446	5.51	107.21	334.33	68.03	234.92
	1980	679	1,777	325	1,170	5,728,434	5.73	118.53	310.21	56.73	204.24
	1990	1,088	1,750	365	1,770	7,237,625	7.24	150.33	241.79	50.43	244.56
	2000	1,192	1,501	349	1,651	7,482,775	7.48	159.30	200.59	46.64	220.64

		frequencies						PMW			
		maybe	perhaps	possibly	probably	TOKENS	RATES	maybe	perhaps	possibly	probably
news	1810	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	1820	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	1830	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	1840	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	1850	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	1860	-	65	23	88	251,623	0.25	0.00	258.32	91.41	349.73
	1870	7	267	117	327	985,653	0.99	7.10	270.89	118.70	331.76
	1880	-	228	128	457	1,303,161	1.30	0.00	174.96	98.22	350.69
	1890	7	240	145	450	1,328,524	1.33	5.27	180.65	109.14	338.72
	1900	14	175	95	320	1,390,525	1.39	10.07	125.85	68.32	230.13
	1910	6	257	108	395	1,471,724	1.47	4.08	174.63	73.38	268.39
	1920	48	618	251	1,050	3,466,223	3.47	13.85	178.29	72.41	302.92
	1930	51	556	296	1,075	3,483,696	3.48	14.64	159.60	84.97	308.58
	1940	45	584	270	902	3,398,337	3.40	13.24	171.85	79.45	265.42
	1950	82	624	256	736	3,400,897	3.40	24.11	183.48	75.27	216.41
	1960	91	608	257	791	3,268,615	3.27	27.84	186.01	78.63	242.00
	1970	206	741	265	739	3,239,980	3.24	63.58	228.71	81.79	228.09
	1980	388	793	182	927	3,847,435	3.85	100.85	206.11	47.30	240.94
	1990	664	709	155	828	3,969,602	3.97	167.27	178.61	39.05	208.59
	2000	559	529	142	772	3,813,548	3.81	146.58	138.72	37.24	202.44
nf	1810	9	180	31	105	429,789	0.43	20.94	418.81	72.13	244.31
	1820	6	574	94	251	1,391,527	1.39	4.31	412.50	67.55	180.38
	1830	29	841	87	516	2,897,442	2.90	10.01	290.26	30.03	178.09
	1840	15	977	117	625	3,407,232	3.41	4.40	286.74	34.34	183.43
	1850	18	711	139	607	2,946,667	2.95	6.11	241.29	47.17	206.00
	1860	15	670	122	581	2,764,676	2.76	5.43	242.34	44.13	210.15
	1870	16	750	128	504	2,650,581	2.65	6.04	282.96	48.29	190.15
	1880	18	848	143	832	2,894,981	2.89	6.22	292.92	49.40	287.39
	1890	312	734	146	463	2,882,110	2.88	108.25	254.67	50.66	160.65
	1900	22	1,046	220	913	3,227,098	3.23	6.82	324.13	68.17	282.92
	1910	104	1,123	299	943	3,361,909	3.36	30.93	334.04	88.94	280.50
	1920	22	1,027	249	874	3,126,905	3.13	7.04	328.44	79.63	279.51
	1930	47	928	244	817	2,927,632	2.93	16.05	316.98	83.34	279.07
	1940	30	772	219	808	2,901,973	2.90	10.34	266.03	75.47	278.43
	1950	89	1,079	197	878	2,937,112	2.94	30.30	367.37	67.07	298.93
	1960	58	915	234	711	2,983,711	2.98	19.44	306.67	78.43	238.29
	1970	94	968	177	658	2,856,202	2.86	32.91	338.91	61.97	230.38
	1980	97	1,171	200	697	2,914,872	2.91	33.28	401.73	68.61	239.12
	1990	146	968	178	646	2,967,189	2.97	49.20	326.23	59.99	217.71
	2000	312	734	146	463	2,996,510	3.00	104.12	244.95	48.72	154.51

3.2 節で見る副詞と助動詞の共起については，上で抽出した 4 副詞を含む行（ADV_COHA_FILE_*YEAR*）を検索対象とし，それぞれのファイルにおいて，各副詞の前後 3 語（7 語の KWIC を作成）に現れる助動詞を副詞と共起していると本稿では見なす。KWIC の作成及び KWIC から助動詞との共起例を抽出する作業は，以下の手順及びスクリプトで行なった。

1.［行頭に行頭である印をつける］ mi テキストエディタの置換機能で全行頭に <HEAD> をつける。

2.［各ファイルを 1 行 1 語に整形］

perl -ne ‘while（/\b[A-Za-z0-9-]+\b/gi）{print “$&\n”}’ ADV_COHA_FILE_*YEAR* > ADV_COHA_FILE_*YEAR_1*

3.［1 行 1 語に整形済み行数をカウント］

wc -l ADV_COHA_FILE_*YEAR_1*

4.［n-1 行ファイルを 6 ずつ作成］

tail *-99998* ADV_COHA_FILE_*YEAR_1* > ADV_COHA_FILE_*YEAR_2* ...

5.［1 行 1 語ファイルと n-1,2,3,4,5,6 ファイルを統合し，1 行 7 語のファイルを作成］

paste -d ‘ ‘ ADV_COHA_FILE_*YEAR_1* ADV_COHA_FILE_*YEAR_2* ADV_COHA_FILE_*YEAR_3 [...]* ADV_COHA_FILE_*YEAR_7* > 7_ADV_COHA_FILE_*YEAR*

6.［node に分析対象の副詞がある行のみ抽出し，副詞ごとのファイルを作成］

perl -ne ’while（/^（\S+\W）{3}（\b*maybe*\W/g）{print}’ 7_ADV_COHA_FILE_*YEAR* > *maybe*_KWIC_*YEAR*

7.［副詞ごとの KWIC ファイルより，対象助動詞の生起頻度を抽出］

perl -ne ‘if（/\b（can|could|will|ll|would|shall|should|must|may|might）\b/gi）{$a = lc $&;

print “$a\n”}’ *maybe*_KWIC_*YEAR* | sort | uniq -c | sort -rn

手順 7. にて抽出されたそれぞれの助動詞の頻度を，トークンで割り，1000000 を掛けた PMW を算出し，副詞助動詞共起 PMW/ 副詞 PMW にて，各年代各副詞の PMW における，各副詞と各助動詞共起 PMW の割合を分析対象とした。

3.1　副詞の頻度

ここでは，COHA における 4 副詞をジャンルごと及び全体の生起頻度を各データのトークン数をもとに PMW に直し，10 年ごとに分けて分析する。なお，本稿では生起頻度を PMW に直した数値を便宜上「頻度」と呼ぶこととする。

fiction での頻度を 10 年ごとに見てみると（図 1），maybe の頻度は 1890 年代を境に大きく右肩上がりになっていることが読み取れる。反対に，1810 年代から 400 前後の頻度で推移していた perhaps は，徐々にその頻度数を下げ，2000 年代には 300 以下を割れ込んでいるものの，maybe の再興により完全にその地位を奪われたとまでは言えないであろう。probably は時代の経過と共にその頻度を緩やかに上げており，2000 年代には perhaps の頻度を上回っている。possibly は一貫して 100 以下ではあるものの，1810 年代からのおよそ 200 年間の間に，少なくとも fiction のジャンルではその頻度は他の 3 副詞と比較して大きく変動していないことが読み取れる。

これに対して他のジャンルでは, fiction に見られるほど大きな頻度の変化は見られないものの，maybe は右肩上がりである。また，magazine のジャンルでは，maybe は 1910 年代から緩やかに頻度を上げている（図 2）。一方で perhaps は 1810 年代から多少の上下を繰り返しながらその頻度を減らし，probably は，変動はあるものの頻度 200 前後に留まっており，2000 年代ではこの maybe, perhaps, probably の頻度はいずれも 200 前後となっている。possibly は，fiction 同様に 100 以下の数値で推移しており，他の副詞よりも変動が少ない。

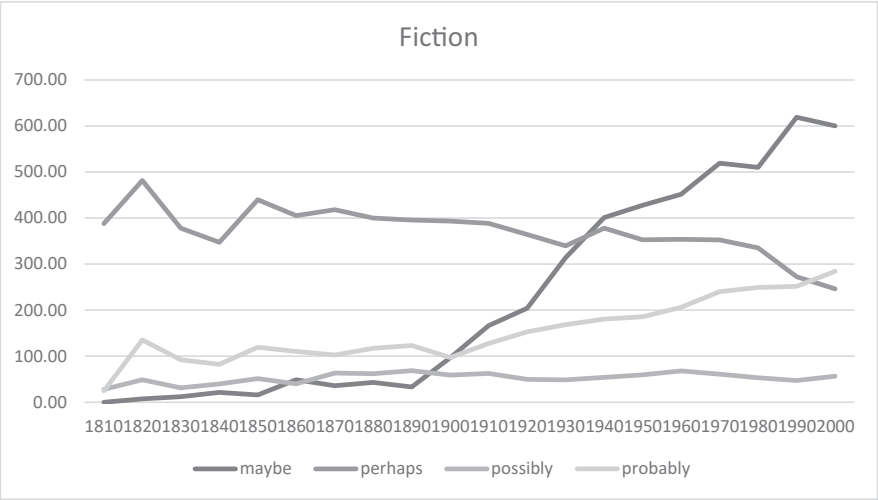

図 1. COHA fiction における 4 副詞の頻度

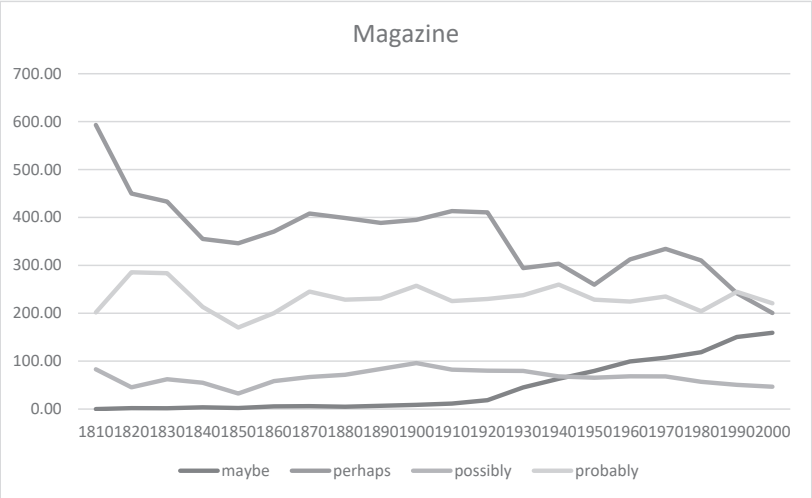

図 2. COHA magazine における 4 副詞の頻度

加えて news のジャンルを見てみると，maybe の頻度が増え始めたのは 1960 年代以降であり，fiction 等の他のジャンルで使われる頻度が増えてきて以降も maybe がこのジャンルで使われるまでには少なくとも 40 年の開きがあることが分かる（図 3）。他ジャンルと比較して興味深いのは，他の 3 ジャンルいずれにおいても，1810 年代からの頻度がそれぞれのジャンル内で最も多いのは perhaps（fiction では 1940 年代に maybe と入れ替わっている）であるのに対し，news では probably の頻度が多くなっている点である。

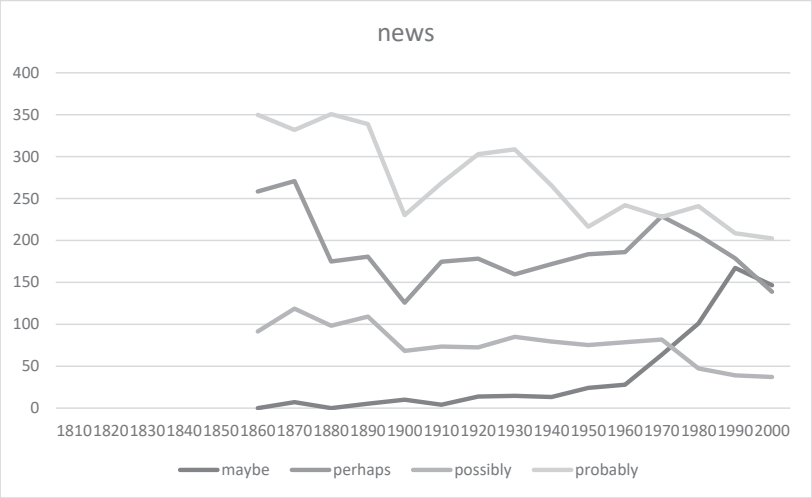

図 3. COHA news における 4 副詞の頻度

また，non-fiction においても，maybe の頻度は 1890 年代に突出し，1990-2000 年代にかけて頻度が 100 になった他は頻度が少なく，このジャンルにおいては多用される傾向にないことが分かる（図 4）。

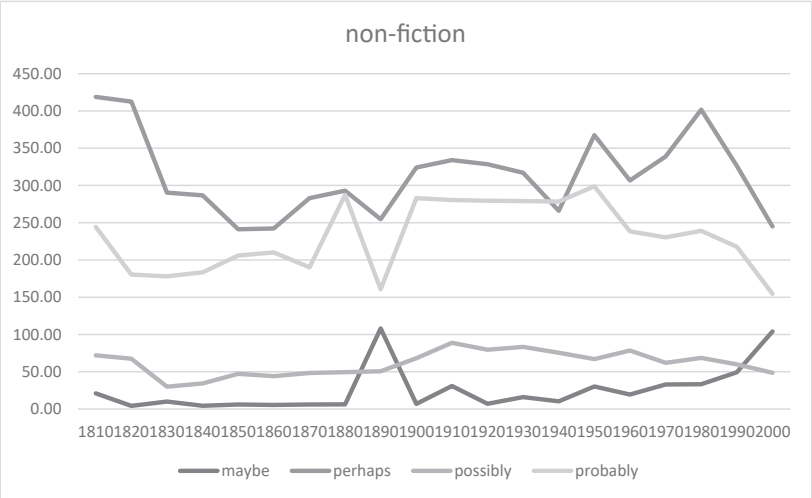

図 4. COHA non-fiction における 4 副詞の頻度

1890 年代に maybe の頻度が著しく上がった際に，probably の頻度が著しく下がっており，興味深い。さらに，non-fiction においては，頻度の増減はあるものの，perhaps と probably がよく使用され，possibly と maybe はあまり使用されていないことが分かる。

全ジャンルの頻度を総合したグラフでは maybe の頻度は 1890 年代から右肩上がりであるが，fiction における頻度の増加が貢献していることは明らかである（図 5）。

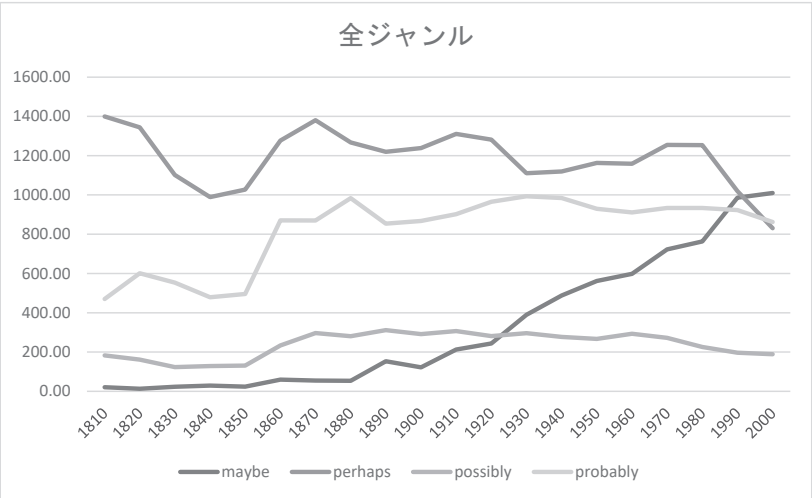

図 5. COHA における 4 副詞の頻度

いずれのグラフを見ても，ジャンルごとの特色や頻度の推移は見て取れるものの，maybe の頻度が増したからといって，その分 perhaps や possibly の頻度変化に大きく影響したと思われるような結果は見られなかった。

3.2　助動詞との共起

次に，これら 4 副詞と助動詞の共起について見る。ここでの共起は，該当の副詞を核（node）としてその前後 3 語に助動詞が生起するか，生起するならば，どの助動詞か，を概観するものである。ここでグラフに使用されている数値は，COHA の 10 年ごとの 4 副詞それぞれの頻度を 1 とした場合に，各助動詞はそのうちどの程度の割合を占めるのかを百分率で表したものであり，2.1 節で使用していた PMW とは異なる。また，本節で分析した各副詞と共起する割合の高い助動詞の種類は，ジャンルごとで大きく異ならなかったため，ジャンル別には示さず，総合した数値を副詞ごとに示す。

maybe と最も共起しやすい助動詞は，1810 年代から 2000 年代まで数値の差はあるものの will であった（表 2）。続いて，would, can, could が比較的共起しやすく，1920 年代以降は should との共起が増え，2000 年代には will について should が多く maybe と共起している。Maybe は，その語の中に助動詞 may を含むことから，助動詞 may/might との共起は考えづらいが，特に 1800 年代に少数ではあるものの共起している例が見られる。

perhaps を見ると，先に触れた G5 における may との共起が興味深く，1850 年までは perhaps と共起傾向が最も強い助動詞は may である（表 3）。

表 2. COHA における maybe と共起する助動詞

MAYBE	will (ll)	would	can	could	shall	should	may	might	must
1810	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
1820	11.43%	0.00%	2.86%	0.00%	0.00%	2.86%	0.00%	0.00%	0.00%
1830	5.88%	3.36%	2.52%	0.00%	0.84%	0.84%	0.00%	0.84%	0.00%
1840	6.83%	2.93%	5.85%	0.00%	0.00%	0.49%	0.49%	0.00%	0.00%
1850	11.11%	3.70%	0.00%	0.62%	3.09%	1.23%	1.23%	0.62%	0.00%
1860	13.09%	3.00%	5.15%	0.86%	0.21%	1.07%	0.43%	0.64%	0.00%
1870	13.42%	3.54%	1.77%	1.77%	3.04%	0.76%	0.25%	3.04%	0.00%
1880	12.96%	3.04%	2.63%	1.01%	1.01%	0.20%	1.01%	1.62%	0.61%
1890	6.57%	2.14%	2.71%	0.71%	0.86%	0.29%	0.29%	1.14%	0.00%
1900	11.90%	2.30%	4.25%	2.04%	0.60%	0.00%	0.09%	0.94%	0.09%
1910	12.30%	3.07%	5.22%	2.20%	0.10%	0.29%	0.00%	1.22%	0.10%
1920	11.30%	1.92%	5.10%	2.64%	0.08%	0.23%	0.00%	0.73%	0.08%
1930	8.64%	3.61%	4.28%	3.28%	0.15%	0.62%	0.05%	0.56%	0.05%
1940	6.98%	3.05%	3.19%	3.57%	0.08%	0.88%	0.04%	0.34%	0.18%
1950	7.10%	2.92%	4.25%	3.03%	0.04%	1.65%	0.09%	0.47%	0.00%
1960	6.88%	2.36%	3.71%	3.13%	0.09%	1.95%	0.04%	0.30%	0.09%
1970	6.37%	2.13%	2.90%	3.23%	0.02%	2.85%	0.05%	0.41%	0.05%
1980	5.19%	2.30%	3.38%	2.79%	0.00%	3.18%	0.09%	0.23%	0.04%
1990	5.64%	3.18%	3.05%	3.42%	0.01%	3.77%	0.03%	0.17%	0.03%
2000	4.36%	2.35%	2.59%	3.06%	0.01%	3.80%	0.04%	0.21%	0.03%

表 3. COHA における perhaps と共起する助動詞

PERHAPS	will (ll)	would	can	could	shall	should	may	might	must
1810	3.85%	3.00%	0.64%	0.00%	1.93%	0.64%	14.78%	3.00%	0.00%
1820	3.84%	4.27%	0.99%	0.76%	0.50%	0.96%	7.28%	3.27%	0.10%
1830	4.14%	3.81%	1.17%	0.66%	0.60%	1.26%	7.22%	3.91%	0.10%
1840	4.64%	4.01%	1.41%	0.90%	0.75%	1.08%	6.32%	2.93%	0.26%
1850	4.65%	4.12%	1.53%	0.98%	0.92%	1.07%	4.44%	3.61%	0.10%
1860	4.92%	4.01%	1.84%	0.99%	0.75%	1.40%	4.76%	2.89%	0.19%
1870	4.26%	4.46%	1.82%	1.01%	0.81%	0.94%	4.07%	3.10%	0.28%
1880	4.53%	4.34%	1.99%	1.18%	0.81%	0.98%	4.00%	2.65%	0.23%
1890	4.47%	4.16%	2.13%	1.06%	0.54%	0.85%	3.43%	2.59%	0.12%
1900	4.47%	3.42%	1.95%	1.04%	0.71%	0.72%	2.87%	2.13%	0.09%
1910	4.35%	3.71%	1.99%	1.42%	0.64%	1.00%	2.32%	2.36%	0.16%
1920	3.86%	3.22%	1.82%	1.18%	0.51%	0.75%	1.43%	1.63%	0.11%
1930	3.62%	4.23%	1.55%	1.38%	0.44%	1.08%	1.38%	1.75%	0.21%
1940	3.14%	3.62%	1.86%	1.73%	0.45%	1.24%	1.02%	1.40%	0.15%
1950	3.02%	3.56%	1.73%	2.02%	0.32%	1.69%	0.93%	1.14%	0.14%
1960	2.81%	3.01%	1.78%	1.91%	0.14%	1.66%	0.85%	1.16%	0.13%
1970	2.46%	2.81%	1.89%	1.84%	0.21%	1.65%	0.56%	0.66%	0.07%
1980	2.42%	2.48%	1.92%	1.89%	0.22%	1.84%	0.42%	0.78%	0.16%
1990	2.84%	2.85%	1.85%	1.74%	0.07%	2.43%	0.30%	0.55%	0.10%
2000	2.35%	2.32%	1.22%	2.35%	0.24%	2.19%	0.26%	0.71%	0.08%

しかし，その割合は徐々に低下し，1900 年代に入ると 2% 以下に落ち込み，1980 年以降にはその共起は稀である。may 以外を見てみると，will/would が共起しやすいようだが，1900 年代後半になると，could, should との共起と will/would との共起の割合はいずれも同じく 2% 前後に落ち着いている。

possibly と共起しやすい助動詞は圧倒的に could/can の 2 助動詞である（表 4）。1800 年代には may/might との共起割合も著しいが，徐々に右肩さがりになっており，1900 年代後半は 2.5% 以下に低下している。

表 4. COHA における possibly と共起する助動詞

POSSIBLY	will (ll)	would	can	could	shall	should	may	might	must
1810	0.00%	1.82%	25.45%	18.18%	0.00%	0.00%	21.82%	14.55%	0.00%
1820	0.88%	0.59%	17.89%	21.99%	0.29%	0.59%	14.96%	19.35%	0.00%
1830	0.40%	1.61%	27.77%	29.78%	0.00%	0.00%	12.27%	12.27%	0.20%
1840	0.32%	1.26%	16.25%	19.72%	0.32%	0.32%	15.46%	14.83%	0.00%
1850	0.84%	1.55%	16.60%	26.44%	0.42%	0.42%	10.27%	12.66%	0.28%
1860	0.94%	1.48%	17.12%	28.03%	0.13%	0.40%	16.85%	12.67%	0.13%
1870	1.05%	1.31%	16.13%	22.09%	0.09%	0.26%	9.99%	7.62%	0.00%
1880	0.97%	1.62%	15.43%	19.98%	0.32%	0.32%	10.56%	8.04%	0.00%
1890	1.51%	1.51%	12.79%	16.59%	0.14%	0.22%	6.11%	6.25%	0.00%
1900	1.87%	1.31%	12.16%	18.11%	0.28%	0.14%	7.39%	5.39%	0.07%
1910	1.09%	1.29%	14.33%	16.97%	0.13%	0.19%	5.33%	5.59%	0.06%
1920	1.28%	1.48%	11.75%	14.77%	0.13%	0.39%	4.50%	4.43%	0.13%
1930	1.16%	1.23%	10.28%	15.98%	0.13%	0.19%	3.04%	3.30%	0.26%
1940	1.01%	1.62%	11.07%	17.89%	0.14%	0.41%	2.57%	4.86%	0.14%
1950	1.13%	1.80%	11.58%	19.23%	0.07%	0.20%	1.60%	3.33%	0.07%
1960	1.23%	0.92%	11.21%	16.70%	0.00%	0.43%	1.54%	3.39%	0.00%
1970	1.01%	1.55%	9.68%	16.68%	0.13%	0.20%	1.28%	2.02%	0.07%
1980	1.14%	1.21%	9.62%	19.32%	0.00%	0.15%	1.59%	1.67%	0.15%
1990	0.46%	1.62%	11.87%	22.44%	0.00%	0.23%	0.46%	1.31%	0.00%
2000	0.63%	0.84%	9.49%	23.40%	0.00%	0.14%	0.77%	1.62%	0.07%

また，ここで注目したいのが，possibly と could/can の共起割合である。COHA における possibly の頻度のうち，could は 30%-15% の間，can は 27%-10% 前後の数値であり，これまでに見てきた maybe, perhaps と共起傾向の高い will や may との共起割合が高くとも 14% 前後であったこと，後に見る probably と will/would の共起割合が 16% 前後であることを考えると，possibly は助動詞 could/can を伴って用いられることが多いと考えられる。

最後に，probably と共起する助動詞を見る（表 5）。probably と共起しやすい助動詞は，1980 年以降下方を向いているものの，圧倒的に will/would である。その他 7 助動詞はわずかな動きこそあれ, 全て 3% 以下の数値となっている。1810 年代には 2% ほどの割合だった may/might は，徐々にその数値を落とし，1950 年代以降はほぼ共起が見られなくなっている。

表 5. COHA における probably と共起する助動詞

PROBABLY	will (ll)	would	can	could	shall	should	may	might	must
1810	15.33%	16.06%	0.73%	0.00%	0.73%	0.00%	2.19%	2.19%	0.00%
1820	9.77%	14.52%	0.17%	0.25%	2.25%	2.00%	1.42%	2.00%	0.17%
1830	11.90%	14.07%	0.39%	0.74%	2.17%	1.28%	1.68%	1.63%	0.39%
1840	9.97%	13.26%	0.39%	0.79%	1.42%	0.98%	1.47%	0.88%	0.25%
1850	10.30%	13.06%	0.47%	0.69%	1.38%	1.81%	0.82%	1.03%	0.22%
1860	11.00%	12.01%	0.81%	1.05%	1.53%	1.37%	1.53%	1.09%	0.28%
1870	11.72%	14.51%	0.56%	1.40%	1.99%	1.22%	0.98%	1.01%	0.14%
1880	12.68%	12.16%	0.54%	0.86%	0.91%	1.03%	0.66%	0.71%	0.09%
1890	12.68%	12.56%	0.71%	1.23%	1.45%	1.35%	0.71%	0.49%	0.31%
1900	10.93%	11.24%	0.67%	1.06%	1.65%	0.84%	0.53%	0.11%	0.28%
1910	12.88%	11.53%	0.93%	1.08%	1.48%	0.88%	0.60%	0.15%	0.18%
1920	16.16%	10.62%	0.79%	1.26%	0.86%	0.73%	0.24%	0.18%	0.12%
1930	13.67%	9.24%	0.85%	1.01%	0.35%	0.45%	0.37%	0.21%	0.10%
1940	13.96%	11.91%	0.82%	1.29%	0.40%	0.52%	0.29%	0.13%	0.13%
1950	14.12%	10.78%	1.39%	1.73%	0.18%	0.50%	0.12%	0.10%	0.10%
1960	13.29%	10.43%	1.41%	2.09%	0.18%	0.46%	0.24%	0.10%	0.08%
1970	11.14%	10.71%	1.03%	1.95%	0.15%	0.73%	0.09%	0.11%	0.07%
1980	11.24%	10.68%	1.22%	1.84%	0.12%	0.53%	0.09%	0.05%	0.05%
1990	10.43%	8.17%	1.72%	1.91%	0.00%	1.26%	0.14%	0.08%	0.05%
2000	8.25%	7.77%	0.85%	1.90%	0.01%	1.62%	0.03%	0.06%	0.04%

4. 考察

本節では，第 2 節で扱った分析結果を考察する。まず，maybe, perhaps, possibly, probably の 1810 年代からの頻度については，1810 年代には頻度が 0 であった maybe がその後徐々に頻度が増し，OED の記載を裏付けるように 1800 年代後半からその頻度が急速に増し，2000 年代には本稿で取り扱った 4 副詞のうち最も頻度が多い副詞となったことが分かった。しかし，その頻度を増やしたジャンルは fiction に偏っており，その他 3 ジャンルにおいては，頻度は減りこそしないものの，著しい差を生じさせる要因とは言えないであろう。fiction 以外のジャンルでは，magazine と non-fiction において perhaps が, news では probably が使用される傾向にある。また，この maybe の急速な頻度増加に反比例して頻度を落とした副詞も見られず，本稿の一つ目の問いである，maybe の代わりに淘汰されつつある副詞は本分析からは見出せなかった。また，maybe, perhaps, possibly, probably の頻度を合計して 10 年ごとに追って見ると，これらの頻度は右肩上がりに推移しており，1810 年代から 2000 年代までに，これら四つの副詞の使用量が全体

的に増えているため，これを考慮して更にこれらのいずれかの副詞頻度が上がったからといって，他の頻度が落ちているという事実はないということができる。総じてこれらの副詞の頻度が伸びている背景，要因，maybe, perhaps, possibly が意味役割として同等ではない／同等である確証は本研究・分析からは得られないが，語用論，意味論等の観点からもさらに追究したい点である。

maybe, perhaps, possibly, probably の 4 副詞と助動詞との共起においては，probably と possibly は他と比較して棲み分けがなされており，probably は will/would と possibly は can/could と共に使われる傾向が多いことが分かった。この結果は，先に触れた G5 の，probably とよく共起するのは should, possibly とよく共起するのは could, might である，という記述とは G5 が近年の英語について述べていることを考慮しても少々異なる。無論，本稿ではアメリカ英語のみを分析したため，イギリス英語も含めて更なる分析が必要であると考えられる。ただ，「冗語的」であると記述されていた perhaps と may の共起は 1800 年代では多く見られたものの近年では非常に少ないため，「冗語的」であることを要因に頻度が低下している可能性も考えられる。一方で，possibly と共起する傾向が高い助動詞は can/could であり，この 2 ペアの共起は冗長であるとは認識されていないであろうことが分かった。また，いずれの副詞との共起割合を見ても興味深いのは，わずかではあるが，should の共起傾向が増してきている点である。助動詞と副詞の共起に関しては，本稿では単純に頻度を観察したのみであり，統語論や語用論における議論をしておらず，またこれらにも配慮していないため，さらなる精査及び分析が必要であることは自明である。加えて，本稿の分析や考察は，使用されるデータがアメリカ英語に限定されており，またジャンルごとに分類されているものの fiction には韻文作品は含まれていないため，イギリス英語や韻文を含めた分析を施すと，また多少異なる結果が見出せると考える。

5. おわりに

本稿では，COHA を用いて，1810 年代から 2000 年代までを 10 年ごとに分け，maybe, perhaps, possibly, probably の頻度変化及びこれらの副詞と助動詞の共起について通時的に調査した。課題であった，maybe の頻度が増した代わりに頻度が減少した副詞はあるのか，また possibly と can/could の共起は冗長であるとして避けられる傾向があるのか，という点を明らかにした。本稿の分析及び考察は，使用したデータが COHA であることからも分かる通りアメリカ英語に限定されており，また，COHA の fiction データには韻文が含まれていないことから，本稿で考慮していないイギリス英語や韻文データなどを含めて分析をするとまた違う側面を見つけられるのではないかと考える。本稿では，引用した G5 の記述を批判しようとするものではなく，辞書によって記述が異なることは，学習者が疑問に思う点になり得るのではないだろうかと考え，情報の選択肢を増やしたいと考えたものである。言語は常に変化するものであり，その意味・用法・語法あるいは文法も母語話者でさえ気づきづらいところで刻一刻と変化している。英語学習者に統一した見解・知識を教授することも，学習をより平易にするには必要であるが，その一方で言語の変化等様々な要因による周辺的現象の存在を提示するに足る情報もまた必要であると考える。

注

＊言うまでもなく，本論の不備は全て筆者の責に帰す。

1）COHA にあるテキストファイルは 1810 年から 2009 年までの 200 年分である。

参照文献

Greenbaum, Sidney. 1969. *Studies in English Adverbial Usage*. London: Longman.

Sinclair, John（ed.）. 2018. *Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary*. 9th ed. Glasgow: HarperCollins Publishers.

Miyake, Misuzu. 1996. Discourse Analysis: Differences in Degree of Probability and Certainty among Four Adverbs –*Maybe*, *Probably*, *Perhaps* and *Possibly*. *Kawasaki Journal of Medical Welfare*, Vol. 2, No. 1. 39-47.

Pic, Elsa. and Furmaniak, Grégory. 2012. A Study of Epistemic Modality in Academic and Popularised Discourse: The Case of Possibility Adverbs *Perhaps*, *Maybe* and *Possibly*. *Revista de Lenguas para Fines Específicos*, 18. 13-44.

Quirk, Randolph., Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.

Swan, Michael. 1995. *Practical English Usage*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press.

井上永幸・赤野一郎（編）. 2019.『ウィズダム英和辞典』（第 4 版）. 東京：三省堂 .

小西友七 . 1989.『英語基本形容詞・副詞辞典』　東京：研究社 .

南出康世（編）. 2014.『ジーニアス英和辞典』（第 5 版）. 東京：大修館書店 .

ウェブ上参照文献及び閲覧日

Oxford English Dictionary　https://www.oed.com　（最終閲覧日 : 2020 年 2 月 20 日）

使用コーパス

The Corpus of Historical American English　［COHA と略記］

※ただし，本稿で使用したコーパスは full text 版である。